

救われる言葉って

山形県 白鷹中学校 二年
迎田 心優

「キアリ奇形による脊髄空洞症と側湾症せきずいくどうしょう そくわんしょうですね。手術が必要です。7月18日は——。」

病院の診察室で突然言われた『手術』という言葉さかいを境に、医者が言っている内容が頭に入っていない。気がつくと、もう診察が終わったようで、診察室から退室していた。6年生の夏、外に出ると夏らしい日差しが降りそそいでいるのに、暑さは感じられなかった。

夏休みの1週間前、入院のためにみんなより早く1学期を終えて、約2週間の入院生活が始まった。入院をしてからは、手術のために後頭部を半分そったり、手術までの流れの説明を聞いたり、非日常のようなできごとが慌ただしく過ぎていった。流れに身を任せて過ごしていると、手術当日になっていた。不思議と手術に対する不安はなかったが、手術が終わって麻酔から目が覚めると、自分の不自由さに驚いた。首からは管くだがつながっていて、足には機械がつけられていた。

1週間も経つと機械や管などがはずれ、だいぶ自由に動けるようになった。しかし、動けるようになってもすることがなく、暇ひまに感じていたところ、家から荷物が届いた。荷物の中を見てみると、着替えのほかにはたくさんの手紙が入っていた。それは友達からの手紙で、一度にたくさん手紙が届いたので、少し驚いた。

入院中はコロナウイルスの影響で面会ができず、人と関わるのが少なかったため、久しぶりに友達の言葉を聞けると思うと、嬉しくてしかたがなかった。私はわくわくしながら手紙を読んだ。その手紙の中には、

『頑張ってね!』

『待ってるよ!』

『退院したら、一緒にあそぼうね』

『学校に来たら、たくさん話そうね』

など、温かい言葉がたくさんあった。中には学校での様子を書いてくれる子もいた。みんなの優しさを一度に感じて、つい涙が出そうになった。今まで寂しさは感じなかったのに。

手紙をすべて読み終えると、なんだかすぐたい気持ちになった。同時に、温かい気持ちにもなった。励ましの言葉ではなく、普段話していることと変わらないようなことを書いてきてくれた手紙も、とても嬉しかった。その子と、リアルタイムで話しているように感じたから。

それから、入院中に何度も読み返し、その度に友達の手紙から元気をもらっていた。その手紙は今も大切に保管している。

温かい言葉は、どんなにシンプルでも、気持ちがこもっていれば相手に伝わる。そして、気持ちのこもった温かい言葉を受け取った人は、心にゆとりが生まれて温かい気持ちになれたり、優しくなれたりする。その言葉に救われるときもある。

だから、どんなに小さな言葉でもいいから、誰かにかけてあげてほしい。気持ちのこもった温かい言葉を。